

かまくらさんだいき

鎌倉三代記

〔解説〕

享保三年（一七一八）大坂豊竹座初演。近松半二作とも言われていますが作者は未詳。全十段の時代物で、豊臣家の滅亡を扱っていますが、時代設定、人名は鎌倉時代に置き換えられています。現在上演されるのは、ほぼ七段目のみとなっています。

〔三浦別れの段 あらすじ〕

北条時政（史実の徳川家康）の娘時姫（千姫）は、敵方の武将三浦之助（木村重成）を慕い、三浦之助の母の世話をしています。討ち死にを覚悟した三浦之助は母に別れを告げに帰るのですが、気丈な母は会おうとします。再び出陣しようとする三浦之助を引き留める時姫、敵方である父時政を討つと時姫に迫る三浦之助。武家社会の非常に翻弄される男女、親子の姿が描かれています。

三浦別れの段

入相いりあひ過ぎ。されば風雅の歌人は、恋とや聞かん虫の音も、

沢の蛙の声々も修羅の巷の戦ひと、身に引きしむる兜の緒、

若宮口の戦場より一文字に取って返す、心はさらにおくれ

ねど、もし落人と人や三浦が孝行の、念力通す母の軒

「嬉しやこゝぞ」

と、気の張弓、はじめてがつくり門口に、かっぱとまろ転ぶ物

音は、胸にこたゆる二世の縁、心時姫走り出で、見紛ふ方

なき武者ぶりの

「ヤア三浦様か」

と、駈け寄って、抱き起さんも大男

「コレ時姫でござんす」

と、云へども正気あら悲しや、詮方なく間もあり合はず幸

ひ気付の独参湯、注ぎかけたる薬水の、一滴五臓にしみ

渡り、むつくと起きて

「母人はいづくに」

「オ、お気が付いたか、なつかしや」

と、鎧にひしとすがり付く

「ム、思ひ寄らぬ時姫殿。こゝへはどうして。問ふ間も惜

しや母人に対面せん」

と行くを、引き止め

「時姫殿とは聞えませぬ。なんぼお嫌ひなされても、わた

しはお前の女房ぢや、夫のかはりに母様の介抱に来たが、

なんの不思議」

「ム、すりやこのほどより付き添ひいるか、シテ母人の御

機嫌は」

「いま、すやとくと御寝まよしなつて」

「お食はどうぢや」

「アイなに差し上げてても、いやとおつしやる、けさはやう

く、粥の湯を少しばかり」

「ハア聞きしに違はず、それでは御本復覚束ない」

「サアされどもお気の御実証なは、独參とやらの力、薬の
驗しるしは目まのあたり、いまお前のお気の付いたも」

「さては母に与ふる薬で精神すゞしくなつたるも思はず知
らず親の御慈悲、ハア勿体なし、く。お休みならば、お
寝顔なりと拝まん」

と、母もわが身もこれぞこの一世の別れと思ふにぞ、さす
がの勇氣も、恩愛の肉身分けしはらくと、先立つ涙案あない内に
て

「物音響かば驚き給はん、静かにく」

と、心鎮めて病所の口、立ち寄れば、母の声

「嫁女々々」

「オ、嬉しや、お目が覚めましたか、三浦様のお帰りぞや」

「義村参上仕る」

と、明くる隔てを、はたとさし

「ヤレこの障子明けまいく。そも三浦が帰りしとは、坂
本の城へ帰りしか。よもこへ来る三浦ではあるまい。そ
りや人違ひ、もしまた来たが定じやうなれば、京鎌倉両家分け
目の大事の軍、戰場いくさに向ひながら、さす敵にうしろを見
せる、うろたへた性根ならば、子でないぞ、サ親でない。

母は病ひに臥しながら、日ごとに人の取沙汰を、余の名は
聞かず、わが子はいかに三浦は手柄したるか、と、仏神に祈
誓をかけ、おのれやれ、はやう死んで未来の夫に、わが子
の自慢せんものと、今際いまわの楽しみ心の嬉しさ。その未練な
倅こがありさま、なんと夫に話されう。もはやこの世で、顔
合はず子は持たぬぞ。この蚊帳かやの内は母が城廓、そのおく
れた魂で、この城一重、破らるゝならサ破つて見よ」

と、百筋千筋の理をこめて、引きかづいたる蚊帳かやうのうち、
泣く音よりほか答へなし。母の教訓肝に銘じ

「ハ、アその御詞忘れねばこそ、故郷を出で、今日まで、一度便りもいたさねども、御命も危しとの噂を聞くに胸せまり、今生で御無事な御顔を、たった一目拝みたさに、こんじやう眼くらんで侍の道を忘れし不調法、御病気のお気をもまままなこ、不孝を御免下されかし。いで戦場へかけ向ひ、華々しき高名して、追っ付け凱陣かいじん仕らん、その時めでたく御対面お暇申す」

と、立ち出づる。時姫慌て抱きとめ

「のうコレ、待つて下さんせ。せつかく顔見た甲斐もなう、もう別るゝとは曲もない、親に背いて焦れた殿御、夫婦の固めないうちはモどうやらつんと心が済まぬ、短い夏の一夜さに、忠義の欠くることもあるまい、これほどまでに付き慕ふわたしが心、思ひやつてくれもせで、心強や」
と緋緘ひおどしに、うら紫の色深き

「ホ、ウ切なる心は察したれども出陣は延ばされず、夫婦

となるは凱陣の後しばしの間と相待たれよ」

「イエ／＼それでも」

「ハテ聞きわけなし。放されよ」

と、振り切り／＼駈け出すを、また抱き止めて

「三浦様。追っ付け凱陣とは偽り、お前は今宵討死に、行かしゃんすのであらうがな」

と、云ふ声

「高し」

と口に手を、覆へど、止まらぬ涙声

「イヤ／＼／＼、これが泣かずにゐられうか。討死の門出には、忍びの緒を切ると聞く、ことさら兜に名香の、薫るは兼ねてのお物語、思ひ切った最期のお覚悟、わたしも前に連れ添ふからは、何の未練に止めやせぬ／＼、なぜ、あからさまに打明けて、『この世の縁はこれ限り、未来で夫婦になつてやろ』と、一言云うては下さんせぬ、やっぱり

敵の娘ぢやと疑うてかいの聞えませぬ、父上のことは打忘れ、日本国に親といふは、奥にござる母様より、ほかにはないと思つているに、あんまり氣づよい三浦様、お前を先立て、後にのめ／＼生きてゐる、時姫ぢやと、思つてかいの」

と、身をふるはし、つもり／＼し憂き辛さ、鎧の膝に夕立の涙汲み出すごとくなり

「ホ、ウよい推量、いかほど親切を尽しても、三浦が疑ひは晴れぬわやい」

「アノまだわたしに疑ひが」

「オ、晴れぬ仔細云ひ聞かせん、ガ、それも益なしもうさ
らば」

「イエ／＼待たしやんせ」

「イヤサ放せ」

「イヤのうコレ、長う止めはせぬわいのう、どのやうに思つても、あのおやつれなされよう、もう母様はけふあすのお命、なんぼ潔うおつしやつても、討死と聞き給はゞ、お歎きが思ひやらるる、今宵一夜は夜伽遊ばし、同じことなら御臨終の後で死んで下さんせ」

と云ふも、泣く／＼義村も

「父母に受けたる身体はつが膚臍、死目に逢はで別るゝか」

と行きつ戻りつ取つ置いつ、またもや咳の声すれば

「これこそ声の聞き納め」

と、思へば弱る、うしろ髪

「せめて暫しはよそながら、万分の一の恩報じ、御葉なり
とも温めん」

と、心の内に繰る数珠の、涙忍びのおのずか自ら、短夜

いせおんどこいのねたば

伊勢音頭恋寝刃

〔解 説〕

天保九年（一八三八）大坂稻荷東の芝居初演。伊勢の古市を舞台にした夏狂言の代表作です。

〔あらすじ〕

福岡貢は武家の生まれですが、今は伊勢にきて御師（下級神職）となり、旧主今田万次郎が紛失した青江下坂の名刀を捜しています。刀は手に入れたものの、その折紙（鑑定書）が見つかりません。

古市の遊郭油屋のお紺は貢と相愛の仲ですが、客の徳島岩次が折紙を密かに懐中していることを知り、岩次に身をまかせると見せかけ、折紙を手に入れようとしています。

お紺と岩次の盃事が始まりました。そこへ貢がやってきます。お紺の気持ちを知らない貢は激怒し、お紺からは別れ話を持ち出され、遣り手の万野からもなぶられ、油屋から追い出されてしまいます。一旦引き下がる貢ですが、その恨みから妖刀・青江下坂に取り憑かれたように、油屋の奥庭で次々と人に斬りつけてゆきます。

油屋の段

納戸へ持つて入る

お紺は過ごす無理酒の酔ひに心も乱れ足

「岩次さん〜」

と呼ば立てられて出て来る岩次

「ヲ、岩さんとした事が、座敷を外してお前はどこへ」

「ア、イヤ、一寸手水に」
ちようず

「アノマア嘘ばつかり」

「エ、何の嘘を言ふてよいものか、証拠人は、北六、
きたろく

万野、ソレ用意よくば早これへ」

と云ふ内奥に声高砂

へ相に相生の松こそ目出度かりけれ

北六万野が取り〜に、とさん盃、硯蓋、銘々に携え
ふた

づさへて

「サア〜申しお紺さん、岩次さんの固めの盃、色直
しはすぐに床入り」

「サア〜媒介役はこの北六、嫁君から呑んで差し給
なこうど

へ」

と無理に突き付け注ぎかくれば、堪へかねて駈け出る

貢、お紺が盃引ったくり、落花微塵と投げつけたり。

「ヤイお紺、おのりやこの盃しては済むまい〜ぞよ」

「オ、誰かと思へば貢さん、お客と盃するがどうして

済まぬへ」

「イヤサ、一通りの盃なら格別、この盃ばかりさす事

は、ならぬわい、コリヤお紺、おのりやこれ迄言ひ交

わした事皆忘れたな。モ前から見ていれば、ほてく

ろしい座敷ぶり、エ、もう了見が」

と立ちかかるを、岩次は引きのけ

「ヤイ〜〜かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚げ詰め

の女郎に指でもささば頬でも、脛も、ぶち折るぞよ」
と云ふに、万野がしやしやり出で

「コレシコレ貢さん、お前はんマアこちの内へ、誰が
許してござんしたへ。お前の様な油虫はな、顔見るの
も胸が悪い。アイ、起縁ぎえんが悪い。サアくくくとつと
と去んで貰ひましょ」

とずっかり言われて、猶急き立ち

「コリヤ万野、わりやマア味な事云ふな。この貢が女
郎の油をいつ吸ふた事が有る。サアく、それ聞こう
くく」

「アノマア白々しい顔わいな、コレシコレお紺さんへ、
最前の文、見せてやらんせ」

と云ふにお紺が懐より、取り出し渡す以前の文、いち
く貢が見てびっくり

「ヤコリヤコレおれが名を騙つて、女郎のお鹿へ無心

の状」

「何と覚えがあらふがな」

「イヤ、知らぬ。元より訳ある仲じやなし。こんな文
やつた覚へはない、あた汚い、あのお鹿。風俗と云ひ、
面と云ひ、しつかい猿芝居のお染、あんまり呆れて物
が云はれぬ」

と悪口聞いて駈け出るお鹿、貢が前に台白だいこうなり

「コレシコレ貢さん、最前から聞いていれば、お前さ
んはん余りじゃぞへく、アイ、私やどうでお紺さん
の様に美しうはない、美しうはないけれど、顔でお客
は取らぬぞへ。コレ、肝心の時にはな、ぐったり堪能
さすによつて、ついに一日お茶ひいた事はござんせぬ、
お前もそれを見込みに、アノ万野さんを頼んでつけ文、
その度々に、アノコレく見なされ、この通りになア、
二分一寸お貸し、ソレ又、この状に、三分貸せ、エ、

まだここにあるわいな、ソレ見なされ、又一両いるのと、モ親にも聞かぬ無心をば、五度や十度の事かいな」

「エイ何を」

「それに今更知らぬとは、ソリヤお前卑怯じゃ〜」
「わいな、筆先でたらし込み、身の皮はいだ生き盗人、

エ、腹の立つ〜」

と、言ひつつ両手に胸づくし、引つつかむ、手をもぎ放し

「エ、様々のたわ言、身不肖なれども福岡貢、そちらに無心言ふ様なおれじゃないわい、コリヤお紺、これには何ぞ訳が有らふ、訳を言へ、どふじゃ〜ヤイ」

「ヲ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つはコリヤ尤もでござんす、ガ申し貢さん、お前と私が仲は、人も知ったサ仲ぢやぞへ、金の要る事が有るならば、打ち明けて、かふ〜と言ふて下さんしたら、何

ぼ甲斐性の無い私でも三十両や五十両の金、まんざら

否とも言ふまいに、わづか、二分や三分のはした金、

お鹿さんに無心言ふとは、モみす〜知れた、イヤサ

見下げ果てた心じゃな、モウ〜色も恋も醒め果てたわいな、サそれじゃによつてふつりと、お前の

事を思ひ切り、岩次さんになびくのでござんす、アイ

そふ思ふて下さんせ」

とけんもほろろに言ひ放す

「コリヤヤイお紺、おのりや気が違うたな、おのりや。

モ流れの身にも誠ある者と思ひ、取り交わしたる起請きしょう

誓紙。まだその上に大切な、サア大事な事まで請け合

ひながら、わりやそれじゃ済むまいがな」

「エ、あた鈍な違ひました、イヤサア気が違ひました。アイ性根が腐りましたわいな、モウまい〜

まい付かずと、早ふ去んで下さんせ」

と口には言へど、心には『ヲゝ道理でござんす、道理

ぢや』と、言ふに言われぬこの場の仕儀、血を吐く思

ひ押し隠す。知らぬ貢は腹立ち涙、傍に北六高笑ひ

「ハヽヽヽコリヤおかしいわい、客が女郎の物騙だまして

取るとは、こいつは新しいわい。コリヤ新版じゃわい、

ハヽヽヽこれが本の伊勢乞食じゃ〜」

と何がなる憎て口、岩次も片頬にせせら笑ひ

「アヽイヤモ聞けば聞くほど馬鹿な詮索だわい。お紺

が心底聞く上は、今夜中に身請けして身が女房、ドレ

金の威光を見せうわい」

とお紺がひざを仮枕、脛ふん反らす傍若無人、見るに

貢は歯ざしみ歯切り

「チエヽ見違うた、アノココなど畜生。その根性と

は知らず、大事を明かしたがエヽ無念なわい。とは云

へおのれに限って、よもやその様な根性とは知らなん

だ、エヽ知らなんだはい」

と、にらむ眼にはら〜涙、お紺が胸はなほ百倍。張

り裂くばかりのせ苦しさ。涙紛らす、煙草さへ、炎に

むせる思ひなり。納戸に始終立聞く喜助。刀を持って

走り出で

「貢様、モウお帰りなされませ。悪い事は申しませぬ

〜、サ、お預り申したお腰の物」

と差出す刀、ひったくり、腰に差す間も気はしゆらく

ら、刀の違ひに目もつかず、万野は傍へ立寄って

「コレシコレ貢さん、お前はんはもうそれでしゃべり

仕舞ひかへ。ヲゝ気の毒やの、ヤコレシコレ貢さん、

ちよ、ちよ一寸ちよつとこちらへおいなんせ、サア〜〜早

ういなんせ〜、エヽ、早うおいなんせと言ふに。ヤ

ナニ、貢さんエ、最前から段々の失礼。サヽヽお腹

が立たう、オヽ〜尤もでござんす〜。が、私に

免じてどぶぞ、堪忍して上げておくんなんせ、コレシ

コレ貢さん、なんぼお前が、やきくくくく思はん

してもソレ、^{せせ}銭の切れ目が縁の切れ目じゃわいな、ア

ノお紺さんを恨みなさるゝ事は微塵も無いぞへ、お前
のその素寒貧を恨まんせ。モほんにく、お前の様な

貧乏神、片時置くも家の不吉、サアくサアとつとゝ

お帰りくくく、アイようおいなはつたエ。エ、何。

煙草入れお忘れたのかエ、ドレく私が取つて来てあ

げませうく。サ、煙草入れ、持つてお帰り。エゝま

だ他にお忘れ物、ナニ、お羽織、ハ、ハ、これは私も

気が付きませんでしたく。ドレく。ソレお羽織。

お帰り去になはらんかいな。エゝ去にやがれ」

と突き出す門口、こらへかねて刀の柄、手にかけてなが

ら忠孝の、二字に引かれて喰ひしる

「チェ、ハ、うぬ」

「ナ、ハ、何じゃへく、齒をむき出し、草来子そうらいしをひね

くつて、ア、何かエ、コリヤ私を斬る気かエ、面白い

く、サアく斬られましょく手から斬るけへ、首

から斬るけへ、おいどから斬るかへ、サア早うお斬り

く、斬りなんせ」

「コリヤ万野、おのれはなア」

「何じゃエ、サア早うお斬りく、エ、どつから斬る

のじゃ、貢さん」

「ム、ハ、エイ勝手にさらせ」

と道を蹴立てゝ立ち帰る。万野は後を見送つて

「サアくく油虫の幕が切れた、岩次さん北六さん、

これからは色直し、お床入りの玉子酒、お紺さんも一

緒に、サアく二階へく」

と言ふもそれ者の高調子

「イエく、わたしやまだ岩さんに帯紐は得解かぬわ

いな」

「ムゝスリヤまたなせ〜」

「サイナア、お前の持つていやしやんす袱紗包み、定めて色の起請か文、それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな」

「ナニ、これか」

「アイ」

「アゝコリヤコレ大切な、アゝイヤ大切な〜〜〜」

「金比羅様のお守りさ」

「サア金比羅様のお守りにもせよ、私に見せて下さんせにや、真実心が解けぬわいな」

「アゝ、テモ扱も、女郎と言ふ者は、マ疑ひ深い者だ、

アハゝゝゝ、アゝ是非に及ばぬ、大切な品なれども、そちにしっかりと預くるぞ」

「アイ」

『アイ〜合点』も一寸遁れ、嬉しき恐き、胴ぐるい、

足を踏みしめ段ばしご、二階へこそは、上り行く。岩次は後に声ひそめ

「コリヤ万野、身が刀を早これへ」

と言ふに、心得、暖簾の内、刀抱へて走り出で、渡すを取って、打ち眺め

「ヤア〜、コリヤコレ身が刀ではない」

「ヤア〜そんなら貢が取り違へて去んだに違ひはない」

と言ふに北六勇み出で

「何だ、貢が刀を取り違へて去んだとは、天の与へ〜

〜、これこそ望む青江下坂」

「アゝイヤ〜それが大間違ひだわい。最前秘かに貢が刀と身が刀、中子をすりかへ置いたに、取り違へて去にをつたが本の下坂」

「エゝ鈍^{どん}な、私が一寸一走り」

「ア、イヤ申し、そのお使いは私が参りませう」

と言ひつゝ納戸を出る喜助

「ヲ、喜助か、よく気がついた、貢に追つ付き、腰の

物を取り替へて来い、サ早う〜」

と手に渡せば

「まつかせ合点」

と、駈けり行く。万野は俄にわかに心付き

「コレ〜申し岩次さん、お前はマアめつそうなお方

じゃわいな、アノ喜助はな、確か貢が譜代の家来じゃ

といな」

と聞くより岩次は興醒め顔

「サア〜〜壺じゃ〜」

「岩次さん、壺とは何壺じゃへ、水壺かへ、塩壺かへ、

但しは子壺かエ」

「エ、コリヤ〜万野、慌てなく、と言ふて身共も

慌てておるわい。コリヤ〜万野、そちは喜助に追つ
付き刀を取り、貢が刀と替へて来い」

「ハイ〜〜、心得ました、貢に逢ふて刀をたくり、

きつとお渡し申しませう、ドリヤ、一走り」

と身づくろい、褌引き上げて

「ヲ、イヤ喜助どん〜」

と声は先、体は後に心も空、足を早めて

「ハ、ハ、ハ、ア、ア、ア、一寸待つて、喜助どん、

〜〜、ヲ、イヤ喜助どん」

と走り行く。岩次は後を見送つて

「万野が戻つて来る迄は、皆を相手に二階で飲まう、

サア〜〜こちへ」

と引き連れて、二階へ

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕明和八年（一七七七）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔あらすじ〕三輪の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求馬（もとめ）（実は鎌足の子、淡海）に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。求馬は、姫の後を追って三笠山の御殿にたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱧七（ふかしち）に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

金殿の段

れてぞ忍ばるる。

かたうずら

迷ひはぐれし片鶉、草の靡くを知る辺にて、息急
きお三輪は走り入り

「エ、この苧環の糸めが切れくさつたばかりで、道
からとんと見失ふた。さりながらここより外に家は
なし。大方この内へはいったに違ひはない。エ、誰
れぞ来よかし。問ひたや」

と見遣る先より、お端女はしたが被かつぎ目深まがに、しやな〜
と豆腐箱提げ歩み来る

「申し〜」

と呼び掛くれば、オット飲み込む合点

「オ、お清所尋ぬるのなら、そこをこちらへかう廻
つて、そつちやの方をあちらへ取り、あちらの方を

そちらへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに
脇目もふらずめつたやたらにずっと行きや」

「イエ〜私が尋ねるのは、お清どのとやらではご
さんせぬ。年のころは二十三四で色白にくつきりと
した好い男は参りやせなんだかえ」

「オ、〜、来たげな〜。それはアノお姫様の
恋男ぢやげなの。三輪の里から路追うて来たところ
を、なにがお局たちが引つ捕へ、有無を言はず御
寝所へぐつと押し込み、上から蒲団を被せかけ〜、
ア、〜、宵の中内証うちのご祝言がある筈と、暮れぬ内
から騒いでぢや。エ、けなり、こちとまで内太股が
ぶき〜と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の御用が急
ぐに」

と喋り廻つて、出でて行く

「サア〜ひよんなことが出来てきた。ほんに〜

油断も隙もなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて、何ぢやいしこらしい内祝言ぢや。余りな踏み付けやう。よい〜。ドレその代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいで退けるが腹いせぢや」

と行かんとせしが

「イヤ〜〜はしたない者ぢや、とひよつと愛想をつかされたら、と言つてこのままに見捨て、これがどう往なれう。エ、どうせうぞ」

と心も空。登るきざはし長廊下、行き交ふ女中が見咎めて

「つしい見馴れぬ女子ぢやが、そなたは誰ぢや。何者ぢや」

「ハイ〜、イヤ私は内方の、オ、それよ、さつきのお清殿は寺友だち、奉公に出られてから久しう逢

はぬ懐かしさ。ちよつと見舞ひに寄りましたら、これはマア〜よう来た。上がれ、茶々飲め、さうしてアノ煙草飲め、アノお上にはあつた滅相なご祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あつたおめでたい事ぢやげな、ほんに内方の様なよい衆のご祝言はどの様なものぢやおのれやれ拜んでなり、腹癒よと、うか〜こゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その聲様をちよつと拝ましてもらうたら忝うござります」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶつてやろ』と目引き、袖引き

「マア〜そちは仕合せな。かういう折に参り合せ、お座敷拜むという事は、女の身では手柄者。したがこちらが飲み込んでお座敷へ出すものゝ、ア、何ぞさゝずばなるまいに、何と皆さん、いつそのこ

とこの者に酌取らそではあるまいか」

「オ、よからう〜」

「ア、申し、その酌とやらは」

「オ、何の又そちたちが知ってよいものか。今こゝで教へてやる。ム、幸ひこゝにご酒宴の銚子島台。あり合ひの賀君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。残りは介添へ待ち女郎」

と桜の局が指図して、いやがるお三輪に、長柄の銚子持たせ、持ち添へ

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。

コレ立つのぢやわいの〜。エ、何ぢやいの。うか〜せずとよう覚や。三度目ついで賀君へ。ア、コレ酒がこぼれるわいのう。エ、不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。これも嗜みなければならぬ。」

「サア賀さまが見たくば早う謡や。馬子の唄なら面

白からう。ついでに振りも立ってしや。いやならこつちもなりませぬ。帰りや〜」

と引き出され

「サア〜何のいやと申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイ〜謡ひまする」

と泣く〜も、涙に絞る振袖は、鞭むちよ、手綱たづなよ、立ち上り

「〜竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ、色の道かいなア、ヨ、エ、ここなほつ腹め、とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆々一度に手を打って

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我々が、ほてつ腹までよれました。馬士どの大儀」

と言ひ捨て、行くを、驚き

「コレもうし、私も共に」

と取り纏れど、ふり離されては、がばと転け、寝ながら裾にしがみ付き、引きずられて声を上げ

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござって下さりませお慈悲〜」

と手を合はせ、拝み廻るを、叩きのけ

「オ、しつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、叶はぬ事ぢや、置いてたも。大胆女の躰をせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を差し入れてこそぐるやら。つめりつ、叩いつ、突倒し

「サア〜これで姫様の愠みょうだい気の名代納なった。いよいよめでたいご祝言、三国一ぢや。躰取り済ました。しゃん〜、〜と済んだ」

と打ち笑ひ、局々へ入る後は、前後正体泣き倒れ、

暫し消え入り居たりしが

「エ、胴慾ぢや〜胴慾ぢやわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何ところへて居られうぞ。思へば〜つれない男。憎いはこの家の女めに見替へられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き〜、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「エ、妬ねたましや、腹立ちや、おのれおめ〜寝ささうか」

と姿心も荒々しく駈け行き向かふに、以前の使者

「オ、そなたも邪魔しに出たのぢやな、もうかうなつたら誰が出ても構はぬ〜。そこ退きや」

と袖すり抜けて駆け入る裾、しつかと踏まへ
「コリヤ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しや〜、」

と身をもがく。髻たむげつかんで氷の刃やいば、脇腹ぐつと差し通せば、『うん』とのつけに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなる。お三輪はむつくりと起き返り

「さては姫が言ひ付けぢやな。エ、むごたらしい、恨みはこちからあるものを却つてそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。オ、殺さば殺せ一念の、生きかはり死にかはり、付きまとうてこの恨み晴らさいで置かうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨み詰めたる眼尻まなじりも、叫ぶ声音こわねもうはがれて、さも忌まはしきそのありさま。じろりと見やり

「女悦べ。それでこそ天晴高家の北の方。命捨てたる故により、汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿を亡ほろぼす術てだてのひとつ。ホ、ウ出かいたなア」

「なんと、賤しいこの身を北の方とはえ」

「ムホ、ウそちが語らひ申せし方は、忝くも中臣の長男淡海公」

「エ、シテまた私が死ぬるのが、いとしいお方の手柄になつて、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ホ、その訳語らん、よつく聞け。かれが父たる蘇我の蝦夷子。齡傾く頃までも一子なきを憂へ、時の博士に占はせ、白き牝鹿の生き血を取り、母に与へしその験しるし。健すこやかなる男子出生。鹿の生血胎内

に入るを以つて入鹿と名付く。さるによつてきやつが心をとらかすには、爪黒の鹿の血汐あせと疑着あややくの相ある女の生血、これを混じてこの笛にそゞぎかけて

調ぶる時は、実に秋鹿の妻恋う如く、自然と鹿の性質頭はれ、色音を感じて正体なし。その虚を計つて宝剣を過ちなく奪ひ返さん鎌足公のご計略。物陰よ

り窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら
手にかけてし」

と件の笛くだんの六穴りつけつに、たばしる血汐受け漕ぎく

「今こそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひしぐ
火串ほぐしならん。ハ、ありがたや」

と押し戴き、勇み立つたるその骨柄、実に藤原の御
内にて金輪五郎今国と鍛へに鍛へし忠臣なり

「のう冥加なや。勿体なや。いかなる縁しずで賤の女が
さうしたお方と暫しでも、枕交はした身の果報、あ
なたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝い。
とはいふものゝ今一度、どうぞお顔が拝みたい。た
とへこの世は縁薄くと、未来は添ふて給はれ」
と這ひ廻る手に苧環の

「この主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様も
う目が見えぬ、なつかしい、恋しやく〜」

といひ死にゝ、思ひの魂たまの糸切れし。苧環塚と今の
世まで、鳴り響きたる横笛堂の、因縁かくと哀れな
り。今国不憫いや増しに

「せめて葬り得ません」

と背なにお三輪が亡骸を、追々駈せ来る荒しこども

「曲者やらぬ」

と追つ取り巻き

「手取りにせよ」

とどつと寄る。当るを幸ひ、砂石の如くほり飛ばさ
れ、『逃げ行く奴ばら余さじ』と、奥深くこそ追う
て行く

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。